

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 20 日現在

機関番号：34412

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22320135

研究課題名（和文）旧真田山陸軍墓地内納骨堂の悉皆調査から見る「戦没者慰霊」の歴史的実相
 研究課題名（英文）The Historical Truth of “the Commemoration of the War Dead” by Carrying Out Research on all of the Urns put in the Charnel House in the Former Sanadayama Army Cemetery in Osaka

研究代表者

小田 康德（ODA YASUNORI）

大阪電気通信大学・医療福祉工学部・教授

研究者番号：50169314

研究成果の概要（和文）：大阪市天王寺区内所在の旧真田山陸軍墓地内納骨堂に合葬される骨壺等 1 件ずつについて、納骨堂内の所在場所、戦没者氏名、所属部隊、階級、戦没地、戦没年月日、本籍地、現住所、遺族、遺骨の有無、同梱物などに分類してデータ化を進め、その結果、件数は 8249 件、実際の合葬者数は 8230 人前後という事実が判明した。なかでも戦局が絶望的となった 1944 年、45 年には急増する戦没者（大阪府だけで約 9 万 7 千人と推測）のうち、わずかに 1303 人分の合葬しか実現できていないこと、しかもそのうち約 7 割が遺骨なしの状況であることを解明した。

研究成果の概要（英文）：I conducted research into the every urns of the dead soldiers put on the shelves in the Charnel House at the former Sanadayama Cemetery of Tennoji-ku in Osaka city. I classified them into the name of the dead soldier, the unit, the rank, the place of death, the date of death, the legal address on the family registry, the present address, the bereaved family, ashes or no ashes, the thing contained in the urn (ashes, a picture, a letter and so on), the place of the urn put in the Charnel House. I made a database about the urns, and I proved that there are 8249 urns in the Charnel House and the real number of the war dead are about 8230. I found out that the urns of only 1303 dead soldiers are put in the Charnel House, although the dead soldiers increased in the absolutely desperate tide of the war in 1944 and 1945. I guess that about 97000 soldiers from Osaka prefecture fell in the war. Moreover I revealed that there are no ashes of about 70 % of 1303 dead soldiers in the urns.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|---------|--------------|-------------|--------------|
| 2010 年度 | 5,500,000 円 | 1,650,000 円 | 7,150,000 円 |
| 2011 年度 | 3,000,000 円 | 900,000 円 | 3,900,000 円 |
| 2012 年度 | 5,000,000 円 | 1,500,000 円 | 6,500,000 円 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 13,500,000 円 | 4,050,000 円 | 17,550,000 円 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：日本史・考古学・社会学・宗教学・思想史

1. 研究開始当初の背景

(1) 戦争による死とその追悼は日本においては歴史に遡って多様な視点から学術的に認識が深められる必要があった。しかし、靖

国神社を中心とする研究が進んでいるのに比して、もう一つの追悼施設である陸軍墓地と納骨堂・忠霊塔等に関わる実態解明は大阪府内信太山忠霊塔の事例など一部を除いて

ほとんど行われていなかった。

(2) 大阪市天王寺区内の旧真田山陸軍墓地については国立歴史民俗博物館による調査があり、われわれの研究がその後を引き継いでいたが、その中に建つ納骨堂についてはまだほとんど調査も行われていなかった。

2. 研究の目的

当初研究は、全国的な納骨堂建立をめぐる動向の資料的確認および納骨堂内に安置される遺骨等の実態把握、関連する名簿等の整理、それらを通じての戦時下・戦後の納骨堂管理と追悼の実態考察に設定した。

3. 研究の方法

(1) 一年目は、研究分担者を中心に戦中～戦後における納骨堂をめぐる全般的動向に関する資料の収集にあたり、研究代表者が納骨堂内に安置されている骨壺・位牌等に関する調査とデータベースの作成に力を注いだ。

(2) しかし初年度の調査実績を考慮した結果、上記調査研究の根幹部分をなす納骨堂内に安置される遺骨等の実態把握および関連する名簿等の整理がその分量・形態の想像以上の多様性により、実に困難な調査課題であることが判明したため、2年目以降は、この課題の完成を最優先することとした。

4. 研究成果

(1) 納骨堂内の納骨数は表1のとおりであることが判明した。

(表1) 年次別納骨数

| 年 | 納骨堂 納骨数 | 鞆淵村 戦没者 | 池田市 戦没者 |
|------|------------|------------|------------|
| 1937 | 88 | 0 | 9 |
| 1938 | 263 | 0 | 13 |
| 1939 | 935 | 2 | 27 |
| 1940 | 896 | 2 | 19 |
| 1941 | 555 | 8 | 19 |
| 1942 | 950 | 4 | 30 |
| 1943 | 1018 | 9 | 61 |
| 1944 | 1088 | 40 | 211 |
| 1945 | 215 | 49 | 217 |
| 1946 | 1 | 1 | 29 |
| 1947 | 5 | 1 | 3 |
| 1948 | 0 | | 2 |
| 1949 | 1 | | 3 |
| 1950 | 0 | | |
| 年不記載 | 2233 | 1 | |
| 年疑問 | 1 | | |
| 合計 | 8249 | 117 | 643 |

* 鞆淵村戦没者は粉河町史第4巻

* 池田市戦没者数は新修池田市史第3巻

旧真田山陸軍墓地納骨堂の特徴は、この表の中に示されている。すなわち、戦没者実態

と比較して、1943年以降とりわけ1944年と45年の納骨数が極端に低いという点である。

少し計算してみよう。日本の戦没者総数約230万人。当時の人口約8000万人とすると、この比率は2.8%となる。一方、1945年最大兵力609万人にこの戦没者230万人を加えると839万人すなわち人口比10.5%になる。(ちなみに839万人中戦没者230万とすると、動員者中の戦没者比率は27.4%) 1940年の大阪府人口479万人(大阪市人口325万人)にこの比率10.5%をかけると、大阪府の動員数は50.3万人となり、うち戦没者数は13.8万人となる。

ところで、1944・45両年度の戦没者の全期間死没者に対する比率である。鞆淵村が76%、池田市が66.6%であるから、仮に平均70%としておくと、大阪府では全戦没者13.8万人の内9.7万人の戦没者となる。なお、ここから引き算すると、1937～43年度の死者数は4.1万人となる。この間の納骨数は4705+年不詳分2233のうち何割かとなる。年不詳分のうち8割がこの間のものと考えれば合計約6500となり、その納骨比率は約15.8パーセントとなる。この納骨比率が維持されたと考えれば、1944・45両年度の納骨数は15300人分あったと考えられる。ところが、1944・45両年度の実際の納骨数は1303+年不詳分2233のうち2割として約450=約1750にとどまっている。すなわち、その差は13550人分となる。もちろん9.7万人と見込まれる戦没者総数と比べると、ごくごく一部にとどまっていると言わざるを得ない。どうしてこのような結果となったのだろうか。ここに、戦時下建造され、陸軍が戦意高揚の目的も持って維持した納骨堂あるいは忠霊塔の問題点、すなわち歴史的理解のキーポイントがあると考えらるべきであろう。

(2) ただし、この問題の答えにいきなり進む前に、1943年、44年、45年と遺骨を含まない木箱・骨壺が急増しているという事実の発見も記しておかねばならない(表2)。

(表2) 納骨者年次別遺骨の有無

| 年次 | 納骨数 | 遺骨有 | 遺骨無 | 開封不能・不明 |
|------|------|-----|-----|---------|
| 1937 | 88 | 75 | 10 | 3 |
| 1938 | 263 | 226 | 35 | 2 |
| 1939 | 935 | 872 | 50 | 13 |
| 1940 | 896 | 852 | 16 | 28 |
| 1941 | 555 | 506 | 37 | 12 |
| 1942 | 950 | 443 | 66 | 441 |
| 1943 | 1018 | 650 | 194 | 174 |
| 1944 | 1088 | 315 | 722 | 51 |
| 1945 | 215 | 75 | 126 | 14 |
| 1946 | 1 | 0 | 1 | 0 |
| 1947 | 5 | 0 | 1 | 4 |
| 1948 | 0 | 0 | 0 | 0 |

| | | | | |
|------|------|------|------|-----|
| 1949 | 1 | 1 | 0 | 0 |
| 1950 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 年不記載 | 2233 | 1909 | 237 | 87 |
| 年疑問 | 1 | 1 | 0 | 0 |
| 合計 | 8249 | 5925 | 1495 | 829 |

遺骨がないとは、文字通り骨壺や骨箱（戦争末期になるほど製造に手間のかかる陶器製の骨壺は出回らなくなり、代わりに杉板で作成された簡便な骨箱が増える）の中に当人の遺骨が納められていないというものである。その数が急増し始めているのである。遺骨なき骨壺あるいは骨箱には写真や爪・髪あるいは当人の愛用と思われる日用品などの遺品が納められるか、それがない場合には位牌が納められていることが多い。中には何もなしという事例もある。ただし、遺骨のない骨箱の中に砂とかサンゴが納められている事例も1942年度以降は35件あった。これは遺族がおそらく戦没者当人のゆかりの品と認識して他の遺品とともに納めたと思われるもので、よく言われているように、陸軍の無責任のみを指摘することは誤りであると考えなければならない。

ちなみに、位牌は1942年から本格的にみられるようになることも判明した。これは遺骨なき場合にその代わりを務める存在として認識されたものであろう。また、全体では36の骨壺あるいは骨箱に本願寺の懐中名号が納められていたことも、戦争と仏教教団との関係を考察する素材として注目し得る。

(3) 1944年の遺骨なき合葬者にはどのような人がいるのか。どこで戦没した人がここに安置されているのか。戦没地が分かるケースについて個別にデータを書き上げてみた。人数の多い順に並べると、以下のとおりである。

(1945年はあまりに合葬者の人数が少ないため考察をしばらく控えておく)

マリアナ諸島 7月18日 230人
工兵第25連隊、高射砲第25連隊、
戦車第9連隊、第31軍司令部、
中部第22部隊（第8連隊の後）、
東部軍管区司令部ほか

バシー海峡ムサ北方 12月6日 143人
第61聯隊、同補充隊、
第8連隊補充兵など

南シナ海など（北緯何度、東経何度で表示されることも多い）

9月4日、9月18日など 64人

全羅南道南西沖 7月3日、9月14日 10人ずつ

インド・アッサム地方 3月～6月 12人
ビルマ 各月にわたる 8人

その他略

以上書き上げると、有名な玉砕戦、あ

るいは輸送船内で敵の攻撃を受けて船もろともに海中に沈み死亡したケースが多いことに気付く。要するに、これらは、国民が知ってしまった事実であるか、あるいは通信者がいて海上等から部隊に戦況の連絡が届いたものと考えていい。

大阪の真田山陸軍墓地に合葬する事務を取り仕切っていたのは中部第22部隊と同第23部隊であるが、要するに、その部隊は、どうやって戦没者の情報を手にしていたのかという問題と、戦没者の正確な情報はどのように内地に届けられていたかの問題の存在を語っているのである。

ちなみに、今回のデータベース完成が朝日新聞で報じられた（2013年6月11日夕刊）後、戦没者の行方を捜しておられる遺族、あるいはその関係者からの問い合わせが続いている。新聞に個人的な問い合わせに応じると報道していただいたためでもあるが、戦後68年を経過したいまに至っても、戦没したとされる身内の安否を確かめたいと念願している方が多く、まだ戦後は終わっていないと痛感させられているところである。その方々の名前はしかしながら、一人として存在していないことが明確になるばかりである。電話等でお話しをうかがうと、すべて1944年とか45年、たとえばニューギニア戦線とか戦場輸送中とかばかりである。悲しい話をしなければならないが、要するに、戦死あるいは戦病死などのしっかりした情報がないということである。戦後の戦死通知は、納骨堂にはまだ届いていなかったと言わざるを得ない。また、届いていたとしても、それはどこまで正確なものであったのか、遺骨のない骨壺や骨箱の増大がその実態を示している。

戦局の激化は、戦没者の遺骨を個々に安置し、兵士らの最後まで軍＝国家が面倒をみる姿を国民に見せ、もって戦意高揚を図るという納骨堂の建立意図の実現を不可能にしていたのである。

納骨堂に納められた骨壺や骨箱から得られる情報をもとに大阪府民の主な戦没地を復元したりしようとしても、それは不可能であることははっきりしてきた。むしろ、ここに安置されない方の存在に目をやった時初めて、軍や国による戦没者慰霊の実態、建前と現実とのギャップも見えてくるのである。

(4) 今回の調査で明らかになったデータに基づく研究は、実に今後の課題なのである。これまで述べてきた論点も、まだその入り口を少しなぜた程度のものである。今後は、ここで解明されたデータに基づき、またそれと日本軍の行動あるいは国民各層の生活の実態調査と相まって研究が深められることを期待したい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

- ① 小田康徳、近代戦争遺跡の歴史性と現代性、考古学研究、57 巻 4 号、2011 年、pp. 113-116、査読無
- ② 植松清志、佐久間貴士、旧真田山陸軍墓地の納骨堂について、大阪人間科学大学紀要「Human Science」、10 巻 2011 年、pp111-126、査読無
- ③ 赤澤史朗、1950 年代の軍人恩給問題(1)、立命館法学、333-334 巻、2011 年、pp. 1-32、査読無

[図書] (計 5 件)

- ① 小田康徳、旧真田山陸軍墓地納骨名簿、大阪電気通信大学、2013 年 268 ページ
- ② 小田康徳、旧真田山陸軍墓地埋葬願、大阪電気通信大学、2013 年 84 ページ
- ③ 小田康徳、旧真田山陸軍墓地関係合葬者名簿、大阪電気通信大学、2013 年 84 ページ

[その他]

データベース

小田康徳制作、旧真田山陸軍墓地内納骨堂納骨データ集 (検索システムを含む) 2013 年、

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小田 康徳 (ODA YASUNORI)

大阪電気通信大学・医療福祉工学部・教授
研究者番号：5 0 1 6 9 3 1 4

(2) 連携研究者

原田 敬一 (HARADA KEIICHI)

佛教大学・歴史学部・教授
研究者番号：7 0 2 3 8 1 7 9

(3) 連携研究者

赤澤 史朗 (AKAZAWA SHIROU)

立命館大学・法学部・教授
研究者番号：8 0 2 0 2 5 1 3

(4) 連携研究者

佐久間 貴士 (SAKUMA TAKASHI)

大阪樟蔭女子大学・学芸学部・教授
研究者番号：2 0 3 4 0 6 2 2

(5) 連携研究者

大谷 栄一 (OTANI EIICHI)

佛教大学・社会学部・准教授
研究者番号：7 0 3 8 5 9 6 2